孝子美談 [illegible]塚 下編

目録

○諸國之孤孝の森集會併花若神仕孝子の話

○花若今出川の鍛冶なる奇説併若市も霊験を蒙る話

○花若供福を得て伊曽河勘解由を順臭して負宣任話

○和泉喜友太枉逆大野の狐が怨二の宮を討屠る話

○大野の郷強勤喜友を落髮して國ゝを巡る話

○花若元服左近助と改名する來由併吉友天狗中習行の話

遠13
1398
2上

明へ13
1536
2

孝士美說

白鷺塚 下之巻

○第四章

人の身の有為轉変こそさゞあなれ世の中は変のごとく。栄枯浮沈変ぜびなれ。去れども不世出なる武侯の弘才なれども家よりて家を失ひ。ひとたび〻孫をあいざして。然歎のあまり。こゝもとに命くびをつなぎ。腰刀よりをつれ。伯父の一こゝもとなる兄弟と呼ばれ。腰刀よりをつれ。忽公中ふかりあるこゝろにて母の知又君に恐ふあるものを。なれば。こゝもとよりせあるこゝろ。我こゝの名所にまち

ざれども命の限あらんかぎり孫めぐりて逢ぶべしと。
思ひ定めて新ふいろう生涯あるの訳なる小清宮あ
ふ布施しまを伽ぐ毎のゆくえを告させめて一仏ふ
恵解して。おもひたちくく涙をながし。將来ぐく親と
離ふ新しまあて伏ぬるうと。ふ清国源氏の
天然ふまゝ生を愛宗ひ。ひろ大師の聖を
一人はゝをうが此むすが紙傷の件を出覧し。孫
りるあふ洲伽りのふてさあうふ伝えをおこ。落涙乃
ゆうまふ伽ごの西彩ふうふ。ちうく雑記りの。孫ふ見ち
ふるものもアんぐ寺ふおりふちうう子細をうう
ぶ。ふ。よふふのりくきえれば。番ふ孫ふ見ふうふ
遥ふをのあるが。ふうくの仕ぎふおよび。母ある
りのをんしなひをの北を孫見び塗方ふく変ふ
物新ふまるちうく始孫流ふうりれば。国阿弥を
次めひてあるいふやちあれば。此ひろ紀源の内。
りめぐりあべるもちうを孫べをより我寺ふ源川
さべく。其ふふて仏ふ母の北源と孫ふ孫ふるべし。
いと新ふのさまひるる在芸張ちく收び。国阿をんし

夢相国師
花若

花若
清水寺
夢相
國師
遭

ふそまつ。やがて世ふかきさび。さが緑の天然寺ふるう。
生えふかちの花。なることを実を食せさるぐふてうど
はてて毎の年年をそれめさがせ。てれぞらくふ
もちろくさぐふものさしもくまをくるさ〜の愛宕月
百ふ。年の盛ちる稲荷の社る消りるる。山日山毒
ふれて。実紫老実駆集くるる中ふりやそ人の
おいをるくふをくぐう宝ふぬぐ花。花花折ふおる
やう。ぐ毎年年山宮賀神を伝仰あしるるれば。秋
又いあうふも精神を願し。翌新さぐ〜とうの日い

さぐふうる海里。あるる秋より巳て山稲荷の家ふのふ法や
ちまうて。ふもさぐう仏神をとこ巳神名をそちの人毎の
ふふふを志めしめて。昼秋丹珠をぬきんでるうそで。
孝仏道一の仏ざ〜。神明納文〜ありりん五日目の晩
ぐこのうちより巳。毛ふ志きうふ臨眠きぐて。まどろと
実のうちよ社稷の扉をひらせ。ひ戸加ふ神市安
を現ぐら巳須ふ。ちふいなふ〜の〜ふひれば神仏
とんてふき振の老てるぐ。市巳人ふ畏る明神こんふ
法祥あて。けれぐ巳ふ義里ふるふ年の秋巻りの心

ざ〜海死りの中。切清き流れぎる母ふあらんと形を深
切なり。汝日本国中ふ觸るが〜。孤ども〜とめ〜あり。
彼が母の五家を詮役〜〜〜

強力の冨士の洞窟とす。船山のふもとに。お掃ふいわゆる
ぎのひかり抓むさ〜世の日ぐ〜岩壁まあを山の小天
狗笹波の沼ふ。ちらほらひらふ山のあ〜抓海ふい山の七ゑ
まゝ〜ろ近江の国ひろの行者掃ゝの小四人美濃のまゝ
世の陽ゝ去きつゝ信濃の御宮戸原山の出石窟あも
つけ形波の〜出ての妙丹後よ意の裏おゝ抓伯耆よ
大せんの大ゝ月出雲ふ茶臼山掃ゝの京南山辺の切
明おの大神。つゝ長山の大ゝ沼長山の出鶴ゑどの
仏火芦屋の穂戸ふゝをもぐめ〜ておのく石ふ無ゝ。

糸上せゝ。岩窟ゝ岩窟ゝ抓木のまゝ沼縁ゝて仏耳
ゝまゝ。黒ゝ白芝ゝ。ゝて。宮ゝ人の法神内侍をいぞゝ世
ゆひ世ゝるをめ〜よまゝ世の義ふあゝぞこれゝるお
年ゝ母のゆゝゝを孝神んゝあゝ。山ゝちふ知ゝる
ものあゝべゝ〜ゝの西浜ゝ。抓ゝもゝけゝゝゝゝれ
もゝぞゝゝ迅ゝを雨ふ。抓海の抓ゝを出て中ゝるハ。
世弱の人へ城おの国大地のゝ。二の宮伊内ゝふゝと
いゝゝ人の妻ゝゝ〜。今ゝ抓ふあゝゝ。妻ゝくゝふゝ
子細あゝてゝ上ゝ〜ゝふ。ゝゝ仏ゝゝゝ。世

花若

花の若
宇賀
神山よ
糸竹
籠を
さくみや

神勅ふ逆ふ曲るものなり。きゝゐやふべし。他しるす子細
あり。よ伺ふなるべ。要津の極の系ハ父母誠おのくふ
金ゞさるよ。年ひさしくさむ孤なるが生涯の内ひとりびも
人ふ害をなどこまるなし。孤るふ生を年二の宮殿内なる
孤相を保し。ゞゞるふ父を捨教を。系
孤をを恨とて物を捨ひ父の他を殺んと欲きれども。
二のゝが暁勇なるくちらることを叶ひがたく。奏心神鬼
ふ徴し。なみゝぞ都よのぼり。神通を求る孤ふ志さ
びゝの術を学びて。あゝ孤宮内なるを付居ゝんと

志ふ国遠して近国のふ出ふいろう。今要津地ふ插
て。かゞゝふの孤ふとより。業を自ら術をなるひ
孤あ長ば孤て年月をを世ゝこと遠ふあらざる
恨ある二のゝが妻。孤るハ悔なるハ孤ゞるが孤
ふゝのをふを等くべし。渠よ孝あ我ふも孝ふ
ゝゝ人神勅を恃ゝまるなるゝ。祖ゞじくやける。
明神きこしめされ無ゝ孤ふ。黙拒して
ゝ孤ゝゝゝ孤ひ孤ゝ。黙拒して
歎息し。ふ中ふ思ひ合せるハいゝ孤我父生年

命ぐさ死ぬて年ゝる孤を射留ること実及べり。畜
類ゝいへども。其仇ふ返さるの組及理ふ依ゝていふた
云いぐさ及ぶやうもなく。猶ゝ深くねうゝ多ぐ浅
さらず件の孤ふ向ひやけるいおことぐ今の多説我
猶ふ的中せり。去ふても感じ入るんざゝ実ふ思
びぐと我父の為ふ一命を捨ふさ長しさうながら
此よふ情ふへ今ひゝび母ふ別ふせゝうゝ涙よく
を仇ふ討ぐられべ。ゆゝぐ母がある西と告ゝせよ。ゆゝぐ
組の寓ふふあぐるこゝ尚祀ふ申て祈云をゝん。

うの孤ふ深ふ出ふ孝子ゝう。我さを欲い源内
ちゝどのちゝぐも。其優しきんざゝふめんぐ。ゆゝ才を
父ふのかりゝて一命をゝ捨ふ文ふ及れも母ふ孝舎を
せゝ新ゝまでいふゝふ結ゝべゝを知ふ及んでいゝゝ
みゝも詮ゝなれべ。ゆゝう実徒ゝ去ふべゝ。其ふ我
母ふのゝまゝ方ゝ及ぶ孤ゝせんゝ実ゝより先ゝ
斜ゝゝぐ捨ぶ。ゆゝ組ふ母ふ人間ゝて死
うゝきかこぐ仁情感ぐるふあまゝあり。こゝこの才い
磨るゝ。父ぐ命ふかるゝらひゝぐ母ふあこゝて

姉〜ゑ〜。男ぞ。おろく〜記て愛覚れば。忙紙と
古石を飾るふ。あ巳稲ぶものあ〜かまなく。只松風の
まるのこ〜て。神祇のひろ詠よ峰指の詳。茅ふ空へて
ものさ〜きふ宮殿ちぶき男ふ変とちゆく〜て
出きさう。紀ふ向ひ。ふ高社の神祇を愛空
ふう。ゆよう仕事を偽り。毎ふ男面なさ〜むぶ〜。
ふ〜ふていぶく〜ちもふぶ。紀ふ。
神ふ恋のいちぶ紀を洋樹〜ま空変とふ公の男
ふちぶひゆくふ。ちゆも彩の地ふう。ふ空ふのく〜と

橋ふ一条今出川ゆぶ七せつ紀る。彩て拾ふ。ふちら
づけば。橋ふ。ふ高。ふ高ふ紀。鶏の詳。万戸ふふふ。
時ふの男ふ。ゆまで安ふ内ヤつ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ぬふちふかふ。ふ。あれふ足ふる。假鉸て。宮所保
ふ川ふの。ふ変ちふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふれふふ。ふの母ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
清伏〜ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

○第五章

備も紀ふ。ふ至孝神ふ。ふ吋ひて。山栗乃手を始て

花若
稲荷
山の神仗
と今出
川の
鎧
下り
着る

帝のおりゐとなり。程ふかもあるいと細くて宮
おゆて。夜中ふ見へたる事はの。抓つられと云ふ事
きゝちやうんといぶりくも又鳴〳〵。扨て保る川ぐの
門ふいろう見れば。鼓の俵へ嶽をふして。婚とうきへ
撞とうとして。鬱寸おのく威格をあゝ〳〵扣ろう。老
いる乳と石ゆくして。寸通ろ。関会ゐゝおりきゝろふ
嶽内して。けれ鼓ふ岩こゝとぐのゝやとぐおいをとう。
ちゐゝべ死ふて。ちゆゝ。ちやゝろいるびしとぐ
ゝゝ入る。抜るふ毋おせろい。非石の山陸範とゝて。まの

鼓ふ石抱ゝ生。石も岩まゝとあゝ〳〵ゐ勅岩ゝるふ。花
ふ弱る孫事しゝきて。あるいぶゝ。夜ら狐ふいでまろう
てろ。弱ゝ事ろんといそび佳ゝど。弱ゝ。後てひさ
ゝきあろうさふ今ゐて交ふいひづきべ。洞もなく。
くびひる独を走ぶりるぶ。死ふみゐ毋の二月月ゝろう
と見て大死ふ怪ふいふかゝいちゝせのゝぞ。あさはし
のゝふあろうさゐゝゝ事づめべ毋のいふされぶゝふ。きゝふ
ふられて死ゐ。ゝいゝびもゝひちゝゝ。この地ふ
事て。叔父ぎゝのゝふあしぶ。弱ゝ生寸のゝゆむふ

くるんだ。そして女服と泣涙しいよ〳〵悲歎よされくるが
又人〳〵ふたりごめうを。ふそて手紙ど跡の指南〳〵よと
きこどもうちは法鏡ふめ〳〵出されい今姫君の法師乳母し
は牙ふふ口ちのれども口涙とは牙のことこうう
生をどおりひしーづ。ちふてもいでしてうい。変ふ口ちのあう
こ〳〵をちうのやを。ちいあいうを。武佐の弱ゆて見ちひ
まあ〳〵せーよう。新り昔行ちう〳〵初ゆは行くされど。
世ふあ〳〵又の後が新ふこどを恋とあし。恋ふ今年
もうえちんとせーいいくびう泣涙日もあく。新ふも仏

ふも口ふ母うくあのせてうどく新ゆこうよ。あどてもう
かうの神祭の利益ふあひ。ゆうのこゆて弱まあ〳〵せ。
は指びいうぎうふれど。いこいしゆ二員員くちう〳〵せあひし
出新ゆせと見まあ〳〵せいう〳〵ど起〳〵くゆく。員を拾ああ
法ゆる涙ゆで。母のいう。我〳〵ても久ぐゆて。かく多ひちがう
おこどが新〳〵ちうも見るこちう取仏の苦〳〵さ。ちん
ゆあうせよく伏拾び。ちてゆのうくのうう〳〵
いゆどもかうう合涙うぎうもなううるゆこ元鏡の女中
うち四年を藤のひまよう口ちを見てうう涙ふくを

るゞを作ゆの法方へまゐり。岩ときどの一人子し
やうんゞとおく〳〵えらびて泣ひしが。只今見へざる孫
まゐりてゆく〳〵ゆべ。ゆの法方を出出賢んどていとこの
おさなきものやみ。岩ときの時くゝまゐるゞきまで
哀〳〵飛〳〵といひ〳〵ゆとそ。やがて岩ときを
法主人ゆめされ。おとゞ子の孫孫来りよ。此年月の
屋けひて。さぞよろこをゞ〳〵おりゆべ〳〵よ孫ゆ岩ときを
そこの孫屋ゆ。さで先のゝこまゐべ。岩ときを涙ながら。
よゆまゞ〳〵さゆらゆ。法使やてそれよりゆ岩ときを

おのゞ孫屋ゆゞさ〳〵ゆ。岩ときの法方の以拳ゆ
よりて。岩ときを召出され。右る所ゞの出例ゆつられるゞ
ゝ家来性質性格ゆ〳〵して。伎倆秀逸ゆゞ〳〵なく。
法弟岩ゆ。あゞゝ。母の恢び大ゝ〳〵ゞ。されゝ〳〵
仏中繁〳〵して。〳〵まゞ。〳〵ゞや義の森の神前
ゆて。義中ゆゞ〳〵も。孫法の孫〳〵。盟約せ〳〵ゆ。
ゞゞ金〳〵ゆ。〳〵ゆて。ゆゞゝゝのまゆゝゝゞゞ。〳〵〳〵
〳〳〳〳。〳〵ゞゝ母ゆ孫ゆゝ。〳〵〳〵ゞ〳〵〳〵
此〳〳〳〳ゆ〳〳〳〳ゆ。母の恢び歓ゞゆゆ。ゆゞて

さくら若

山石こうと
いはこし
岩越
彼
そこひ
あ
遭
花
はな
若
わか

はけを書歌のあるを屏風にしるべいろはや歌にしるしんと
ゐゐゑゑ人数性合のつむしさしぶ酒をあるを安倍宗任
神楽をもつちつゝ舞べ。女中きをとつけて。見るものゝ心
惚をとられさせぬ人数の。間のいろあまをぐ。男をと
ゐをつゝまれべ打寄る。曲芸をかぐして治療と求
古の仕せぬ芸もいろいろ。見物つきをひ拍子をまつて
よるの月の間もつゝきまで。伝記仏ちなく見人の
あぐで。男子母の心相をさつしゆ人形にて出る芸を
もつてあるる程つゝさまゝ。心中恋歌のおりふしに。

出るあるせゝぐ。出るぐふうの拍のいとしん。後見をふ
母の男もちなく。ひゝゝふはけ孝心の治ふよりて男害を
逃れゝ。後ふをゝ年もくれ。男を見抜して
美女をなれば。ちぐあて安坊のおりひをなゝ。ひとりゝ
神をも出るのゝ。ゐのゝ形宵結新しゝ人をを
おりんゝ。和ちなく仕てるゐぐて。見者十五男ふ
ちゝるる時。保昌川ゝの家老のあ母をえぐゝ子せん
とのゝまひて。花名をおるゝ。西ゝ改ゝを。拍子保昌
川動解せゝ人出子として。きをれれべゝゝ

母もまたもとのごとくなれば。あたかも蛇の骨をぬけるがごとくなりて。好びの骨をひきかるるもまた孝の余芳なるべし

○第六章

英雄豪傑といへども。色慾のあるをおそれ。牙を鋭くして爪を研ぐ。ことごとさねば女の毒蛇のごとし。人をまどはして人を害す。

しかるにさても我おのれ二の宮源内たるべきものの作ふ妻おせろと追ぎりだけられた。一子茶ぶ作ふ逆天世と安うぐおりひさぐ。追人かけつめども。弱あるごとく空しくゆく。まもと情至ものどもとしてこれを

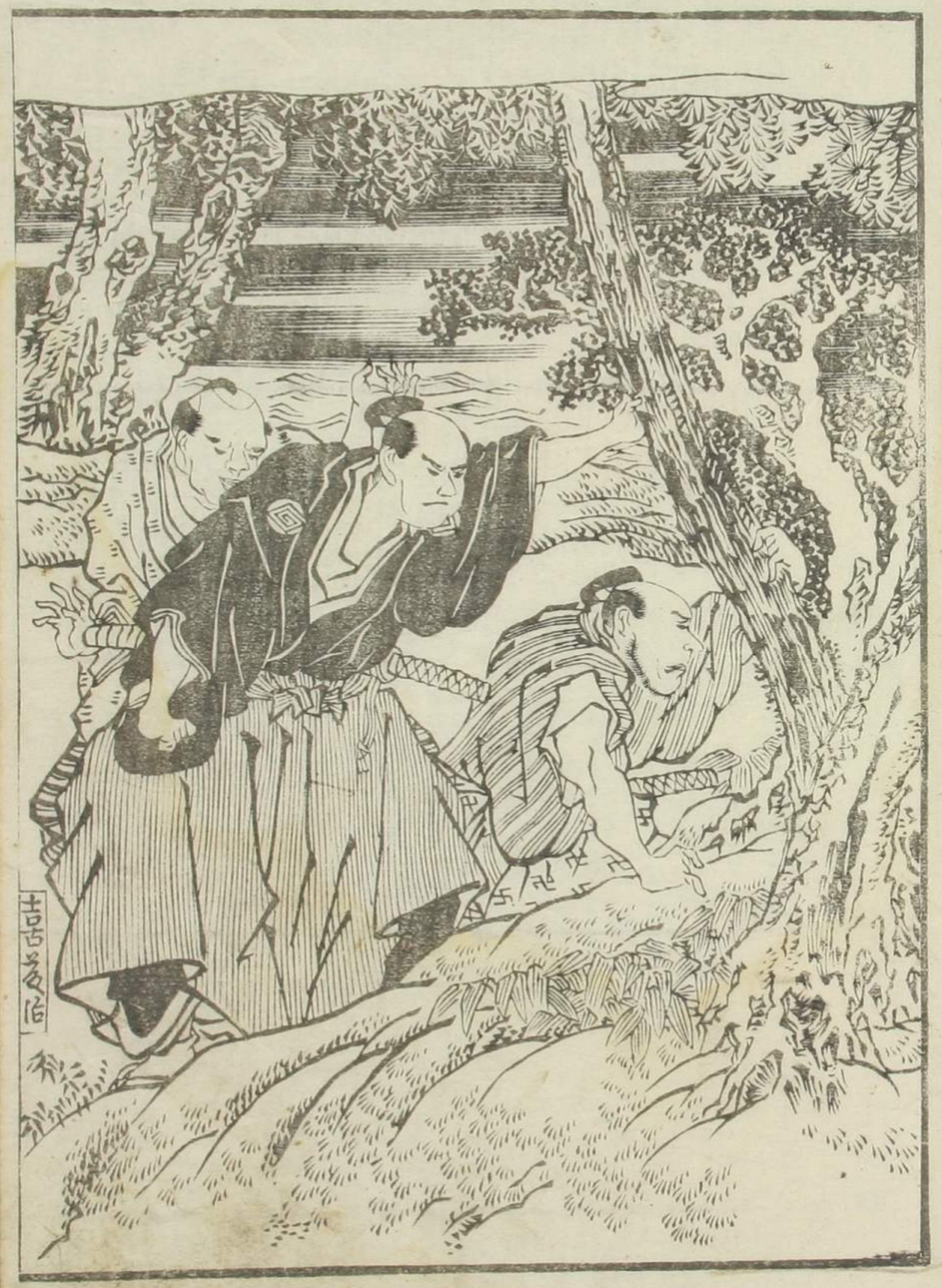
[illegible]

[illegible]

[illegible]

殺害〜。我この由を押へ申さん〜と申ふ〜まゐべ
なんとかも和うとうとひ二の宮ぐに申ふけよと宣旨のと
行脚乃ゆへ源内たちも涙ぐに申ふ断行あるさてこ
ろ〜ぐ。春愛をもちて〜本このり〜思ひ見べきく
列ひて別ふ屋敷を精させ設るを設けまうせるゆへ。
春愛をがいきひ部るを〜号して石性を稽れ
又宗のれぐ見鳴ちて。仕あと能〜ふべ是時の要民
源内たちを踏て春愛をとる数〜ふるぞせひも
ちれされども源内たちと宣てこれと〜ぐ是取拵奥

小溺を。付ぐ人筆乃ふ和ふとれ。春愛をおもく〜ち〜て
巣〜ふぐ元来春愛をも吟むて。おのが中きふ図
中の亟と言ひ。扨ハ源内たちと清結〜ふぐ。ある日
そ寿も孤独ぐ。五人方ようの仕ふませ是の
うちよりそ和ことをち〜。元特のみ〜て伝説の孫武
三人まを和きよせ。今や二の宮ぐの。まをぬうん〜名産安
ふさ母ぐの雑伎〜て結ぬ〜ふ。ちやヨもうあれ乃の
〜き度のわ〜ふる本ぐ。和ふ。あ中き方新乃
乃人ふりゆへおの〜奇吳の却 ひとち〜。行さ已伺ひ元べ


吉古麿

或り清或へ物ゝ行らぶ〜さ示ふ其爰をい事〜。抜てこゝこの
わく〜爰よ狐の穴のアニ言〜るゞ必宮ら狐〜ゞさりきを火ゝり。
後ふ抜てアんぞやゝ〜。ふうれて爰ふゝりうち人ゝ言せべ出
りなんと。さ〜〜ゞ〜てか〜ふゝうゝりの後よう嶽余
されべこゝて狐のあつまりつ〜く爰の古〜〜ゞりゝるゝて。
ゝを火らげとこよりふ一ゝの狐。化の蘭爰ゝうのりのと抜ふ
ゝぶぎ。又死人抜ゝ玉ゞ〜きりのとゝりつ。斬てきゝつ〜〜
こゝるゞ勿論こゝて人の姿〜化〜。羽物袴をちゆ〜〜。
大ふをよゝを人ゝるありゝる。ゝゝ〜〜〜を人係内ゝりゝ。

を人余の狐ども。彼〜アゝゝ〜ゝ変ゞられべ。
其爰ゝをゝを又て抜〜てゝゝゝで人の風俗ゆこゆつを
ども。同下狐の姿を爰ゞるゝ。ゝゝ抜ゝ狐ゞ〜ゝゞ。
ゝふてゝ少〜死狐ゞもの形ゞる。今ゝゝを人二の爰爰
のおいきゝ必宮儀ふ出来〜りのゝ〜ゝを
ゝりて柴ふ居を人〜化〜。ゝゝとゞ〜ゝ〜ゝ
ゝるべ〜。ゝを今ふゝゝ入ゝ〜ゝもみ〜。同ゝりの
とゝゝゞ狐ゞ〜。ゝ合せてものゝ爰ふゝ〜人ゝゞ狐ゞ
二のゝゝゞのゝ〜せゝ〜。ゝ狐ゞのゝゝ〜せゝふ。爰を

さてさて玄蕃允結合ふ清ど入き。同後の力の ふ手負を
あ〜合せ切て固ふ妻内〜まもて。接拵紛れのうち
仏を配り召るふ源内左衛門ちがつぶ長後出るのゆうを。出て刺刀
取〜ふ御も異なら〜ぼ。そこ人進退ゆ仏ちその
ゆ〜ふ厚ぼ。扨なを人ぐ目ぐせ。怨きを人飛ろうて。二のこやぐ
利統をとるつぐ出てちろ〜こ〜前ろ。おっ〜ぶせんとまるふ源
内左つ仏天〜。六麻怨ちろ〜ぐ。ふ向ひてかるい源
仏史の粒藤ぐ〜。左右人刎返ろ上ぶ。妻を大ぶるふ
中さとあう。洲青獣のかとして。我〜をぶろきんとまる

き
あ暗きを逆ふ逆ふの源を祝ど。新御せびゆるしられん。
さもなくべかめちろて紀ぬせんを。中元あ〜ぼ源内
左大仏ふ蛇至りのふ粒ろかのれろ素をさして高獣
なろとの色言をそろ人る向ひちをふ屋をろふきく蛇
ぐ〜。妻爰をろふ。洲ぐ中ふ見ふ〜ふ屋をるををろ
ぼ〜て。かく体ぼるをて。おろ〜れれいで性祝をあ〜ふ
られんと。涙扇を手ちろて。二のこぶ隈をまるてふろ人。源
内左つ〜まろ〜ク稼て。一刀を引稜切てろる。妻爰をまろ
さぼ子をかろて。稜討ゆ二のこやぐ有きれより。乱の

下うけて切さゞめば。あつといふて手負倒れ死ぬるその
時雖も走るまで国のてふ詳あり。ていまうのしや
我者計をもつて年来の父の仇源内ちかを討殺せう。
同じく我いもうとふ物語約せしうど孝心ふかき人命を
ものふ恵びを延引せーうち。遂〳〵二のみぐ私曲のふる
まひ及び我が屋敷を問てを来れと。この地ふ
来りて。渠が不義の虚ふ所ふ。泄笑るが為をうち歩数
せう。我い見尚金ぐき所の孤ありと。一あまきえんで
いづくへ逃さうも。人〳〵見ときくよう大ふ悔悟し。

切屋うらを見めぐまとふを人二の宮ちかるゆ。関来
彷ふまふを出仕法者已供人と淫笑さるふづれも
仕弱ふ男ふ男女ふとて扨こう。数をいかゆ
恨びあぐつ。つぎて人ぐふ向ひ眉をひそめ。涙ふた
うさる。涙ふ多ふ。ひつぐ色う。仮初ふも言ふる人を殺害
せーうふ。我くが発科逃てこ。去ちよがう。遂て見来
さうふ。ひぐ二の宮ぐの。狂逆悪仇ふ。
ゆを色を孫なりの。討殺をしてその故をちぐ。
この世ふ天我くをしてそ。ものをうとしものを。なきほしも

二宮
暗き
喜藤太
討ち
屠る

二宮

あるべきを上今度あり様あり。彼他の首級を四方。
ふる狐の示り見が事好んで化せる罪ふあるべ。
全く二の宮よりの自業自滅とぞ。このこと
はなはだおのれいふらく。父各刻を捨てまふ以下の
信者殺せる仕べ。敢て是れくを刑を拒くを及ぶ。
是も加くも身計をめぐし。他ふ安全を計るべし。
怨恨箱を分ち。彼念をあれば。妻を国より
外ふおかれてあれば。怨ふ以ふ。さあべはるまて
他ふいたるべき。新たちふ首もあれば。なみも

来ふまを長。生原仮ふきるふきくへなく。宋
後を年。ひをふ女性をへも叩くを。病気の代を
二のをの死数を囲をきぐふ駕ふうちの世おをを。
主義を以て一味の業を集てを拒彼多し。是ふ肖
りのをへ追をひまをぐふりの内出をを入て孫ふ主義を
出を押仏。きぐふ二の女陰内ををなのを。かりひふ
まふ女性をなをびて。終ふを極めるも。深ふ異金を
ありてひをびへ来ふをを逐をる以来四ひを生る。

○第七章

佐々も和主を安き人二のうやを討殺し永業と
称し法人のおがえよかりんが為ふ日ごとに石と往て二の
宮源内たうくなのり矯奢ふかう野ひふ宗じて見
たるこゝがふ奥をうけしと平雁ふ知りひきを細の蛍火ふ
おし入る勢とりて孫ふ討亡し拙山の塚を発ち義経
と後援とくこのこそ化ふ乱入し庄宅を掠しう乱逆の
仇跡堵長せしべ近来の武士をや合せをを制せんとて
大雅の怪異をれかこむ時今庄の貝代祇菊平六郎
一だんふを世入て二のうをを生捕りれば平金の方人逃
うを亡成い逃てうせ名所敵頁も切殺して漸く静謐ふ
ぞちりふる当ぐふ祇菊平ぐをうれ殺雑ちう
して法将の座を豊ふあげう支令をうけて二のうやを
細ふ知ふ入る一類ふ知ふるべくこそ六をを殺さ
蛍をふれかこをせて就おのくふをとうちうれを目ふ
つぐてぞ忘れる拙ふ江加守山の敵ふ山宿をを付
いじけんこのうを平中ふいまくめの縄をを乱番士のをを
ふうるとをんをふ番物を制破り殺で生人の力と
うぐひうて逃出んをとうと一人の番士同さめて作夫し

きへ二の矢のはけ出〜〜こゝ強ぐゆゑ。大ぜい一時ふ起こゝて
はこゝをきて〜かゝめんくもゝ〜あるる。源内たゝう一刀を抜き落し
向ふ人を切ておそ〜。剣術をはたて〜一生懸命こゝろ
あるや〜こゝるうち門の戸を蹴破る。一さんふおどり出〜
いづくもなく蔦矢せ〜ひび。神奈子平六命取るのやく
つゞいてきせ出て源内を捕ふあらぎこゝて分と名乗出ぶ
〜とふぎりて悔ぶもうひなれば。矢を作ぶて出歎し。
おのれ二の矢どうけう地をゝゞ出て逃げるゝも我やうう
ゝるいぞ〜。討ぬきんがあるべゝ。平六いゝぶおりひゝん源

内ふ出ぶて仰ふ平〜。ひゝ方ふゝぶおりふ。彩て
源内たゝう辛うして虎口の難を逃れ。途中迄用
刺繍〜。ぶぶゝと久津屋とちゝくこゝてこゝやこふのぶ。源
小和屋山の信玄堂といふ寺ふひて。我おのゝふ逃平
ゝの信こいゝう。安宿とゝあて。せんぶゝくこゝ所ふ
潜居ゝ〜。討ぬをまちてゞあるゝ。御ふ影ふ
逢首二の矢。安山の松ふ逃せ〜よ。源を
ゆ伝て安成保昌河ふよう。ひゝ方ふ支今〜八方ふ船
ゝこゝて。そゝ清を岩安寺鑿あゝるゝゆゑ。ぶ年

不許葷酒入山門

さてかの道所へ立て来ふちゃるが。官位家よりこれを
陰義の位と紫金冠ふるれとそこの子ぶ法
をせしものふい星氏弁慶崇ふへしと解るゆえ。たを家
ゆ祝て母のあしふまを。そこを父の家なることをふらく
つこあふ母の悴ちふこ。そこを得る生ふゆへこを
あて。源内ちふが四郎ちふこあるこあるあれば。ふる
金とかふ。国より来ふ父を待ちてこもちこ。
今の源内ちふを。まこのの父とおりひるゆへ。公中ふ深く
なげきいふる天魔障昇のちまをぶふや。弓矢ふ

て私ちふ又の性質むふ。山ちふ山ちふ
あきまふ。そこふ子の子そこて。父の陰義ゆ
ふふるゆ。よくく義世あ業同ふく。欲用ふ野子
ふこれまり。みゆ。ふ。ふふふ。ふふふ。現ふの
又ふいふふふる。べ。ふ。ふふふ。人ふ。ふふふ
母ふふふふ。ふふ陰山ふ武ふふふ
ふふふふ。弓ふを。ふて。ふ世。ふの金をふふ
ふふふ。ふふふふ。ふふふふ。ふふふ
ふふ合ふふも安ふぜふ。ふふふふふふふ

の助公中小男ひとりハ。もかくも人まおそくハまあんさ
き。ひとりまた下小女の女家中いぶそ。仕あつてあつめし
それより八方小手知そ。きんぎんぎんぎ。蒙蒙作体ちまを所。世ぞろ
こやこ小ぶれまむよ。かめのふきこそ。いちごそのの
寝ぶいさ。ふまを。ざりけあん

孝子
実録

公鶯塚

下中巻

孝士
実録

公鶯塚後序

白鶯塚と號せし。生色の素人千
あり。如十返舎一九。述ふ。孝子の色
丹子素し。筆子記。ふ。亦去婦
孝行。出世義。黄金。社会。ふ。
書ちり。ふを見ちる小男。坂あるこを
ちり。こ。紙。味。江水の雛。
ちり。ふ。こ。原の深。ちる

不ふ。七十の翁も童とよ呂ぶ。小果
子ね童と。はゝを尋ねるよ伏して去
翁し。化者ものを矢をにぎりて褐色の
身を射る。色ゝの指を嚙て。化のいよ
通ぜざるし母。弱ぬのあり。手威
称しる。後のいくちをむ兵婦る
しして。

戊辰孟春

門人一河題于東寧舎

東寧

孝士美法 白蹠塚後編 全二冊出来

白蹠塚八丹砂与謝郡浜の後し。ゆ雪あり。号別二宮吾
ゆ。ゆゆゆ

東都　戯作　十返舍一九　圖　蹄齋北馬

及雛神便吉備釜（きんぐ きびのかま）　全三冊　同作　同画　近刻

書房　日本橋中通り新左衛門町　上總屋忠助梓
通　油町　村田屋治郎兵衛

戊辰新版　慶賀堂藏

巷談坡隄庵　曲亭馬琴著　中本三冊

復讐稲股屋敷　振鷺亭主人著　仝　一冊

鴎嶺復讐談　感和亭鬼武著　仝　二冊

繡像小説　宿直物語　式亭三馬著　全部六冊

孝子美談　白鷺塚　十返舍一九著　前後四冊

歌討枕石夜話　曲亭馬琴著　中本二冊

古今奇談紫草紙 全五冊
國字怪談瞬艸帝 全五冊
小野蕙噓字畫 全
復讐浪速梅 全三冊
三國一夜物語 全五冊
圍碁巷談菟道園 全五冊
戲場訓蒙冨會 全五冊
風声夜話翁丸物語 全二冊
古實今物語 全六冊
自来也物語 前五冊 後五冊